

Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Vol.3

Chapter 4 English for Academic Purposes

Carmen Perez-Llentada and John M. Swales

発表の構成

- 1) 著者情報
- 2) 論文の構成
- 3) 論文の要約
- 4) 考察したい点
- 5) 参考文献
- 6) ディスカッションのまとめ

【おねがい】

このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻日本語教育コースの授業「日本語教育方法論演習」（授業担当者：南浦涼介）での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. の発表のレジュメです。教育的価値、資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文等への引用や掲載は固くお断りいたします。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については、東京学芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>) までお願いいたします。

1) 著者情報

① Carmen Perez-Llentada

現在の職業 University of Zaragoza の英語言語学の教授

専門分野 高等教育、教育方針、教授法

(Higher Education, Educational Policy, Didactics)

Academic Writing

Rhetoric

Genre Analysis

② John M. Swales

現在の職業 Michigan 大学の名誉教授 (Professor Emeritus)

専門分野 談話分析、複合学問、修辞学

Discourse Analysis, Composition Studies, Rhetoric

著作

- ・『Episodes in ESP』 (1985) Oxford
- ・『English in Today's Research World: A Writing Guide (with C. B. Feak)』 (2000) University of Michigan Press
- ・『Academic Writing for Graduate Students, 2nd Ed. (with C. B. Feak) 』 (2004) Michigan
- ・『Research Genres: Explorations and Applications』 (2004) Cambridge
- ・『Telling a Research Story: Writing a Literature Review (with C. B. Feak) (2009) Michigan
- ・『Abstracts and the Writing of Abstracts (with C. B. Feak) 』 (2009) Michigan
- ・『Incidents in an Educational Life: A Memoir (of sorts)』 (2009) Michigan

2)論文の構成

番号	タイトル	日本語訳
1	Introduction	序論
2	EAP Teaching and Learning in a Global Perspective	グローバルな視点でのEAPの指導と学習
3	EAP Research on L2 Learning	第二言語学習におけるEAP研究
4	Corpora and Teaching EAP	コーパスとEAP指導
5	EAP and Student Diversity	EAPと学習の多様性

キーワード

学術英語 (English for Academic Purposes)、コーパス (Corpora, corpus)、研究論文 (RAs)、ジャンル (genre)、EAP 学習者の背景

考えましょう

EAP (English for Academic Purposes) の学習はなぜ難しいのか。

①私たちはなぜ母語で書かれたものであっても「論文」が読めないのか。

②私たちはどうして「他分野の論文」が読めない・書けないのか。

③では、どのように EAP を学べば良いのか。

3) 本文の要約

1 序論 (なぜ、EAP が必要なのか。今までの EAP の教え方ではいけないのか。)

1.1 今回取り扱う内容

過去 30 年間、EAP に関するほとんどの研究は、第二言語学習者の中でも特別なグループのための、特殊な語法に関係するものであった。しかし、最近のコレクションでは、EAP のジャンルと談話分析の論文が広く取り上げられている。(例: 「特別な目的の英語のためのハンドブック」 (Paltridge & Starfield, 2013)、応用言語学百科事典 (Chapelle, 2013)、および学術英語のための Routledge ハンドブック (Hyland & Shaw, 2016) そうした先行文献を引きながら、本論文では EAP の専門的な世界と第二言語の教育と学習の広範な世界との間にみられる相互に有益なインターフェース (共通事項) の発見に焦点をあてる。

1.2 EAP 教育の分野が世界的に重要な第二言語教育の領域となった背景 (1980 年代以来)

そもそも、EAP 教育は、専門的な言語知識とリテラシースキルの教授・習得を含む。大学生や若い研究者が学術や研究の場面で、英語を用いてのコミュニケーションを成功させることを目的としている。

- ・英語は高等教育と研究の主要かつ国際的な言語になっている。
- ・高等教育機関における留学生の数は増加している。
——世界で活躍している、英語が母語でない学者と英語が母語である学者の比率は 4 : 1。

よって、国際的な学界で活躍するために、英語でのコミュニケーション方法を学ぶ必要性がかつてないほど高まっている。

〈5 分の 4 の学者は自身のジャンルの EAP を学ぶ必要がある。残り 5 分の 1 の母語話者であっても EAP を学ぶ必要も?〉

1.3 従来の EAP コース

従来の EAP コースが基づいていたニーズ分析とは…

学生が目標とする環境で体験すると予想されるテキスト（ジャンル）と、それを理解できるようにするために必要な知識とスキルを見付ける方法。（Paltridge and colleagues, 2009）

ニーズに応じた課題を行うことで、学習者が自らのジャンルの社会的行動やジャンル特有の文脈を認識していく。（Swales, 1990, 2004）

課題を用いた具体的な提案（Feak）

- ・ 課題は学習者の学習プロセスを評価して作る。

ポイント！教師が教えるのではなく、学習者が課題によって「気付く」。

（気付きの例：言語の特徴、修辞の目的、コミュニケーションの目的、そのテキストが想定する読み手）

- ・ 調査ベースの学習も行う。

ポイント！情報検索や分析・批判的思考、学習者の会話のコミュニティ内における実践をサポートする技術が身に付く。

1.4 EAP の論文は第二言語学習の理論と原理に基づく課題の開発を推奨している。一方で、EAP コースが行われる地域のコンテキストや受講する学生グループ自体を教授学的に推論・知覚する必要もあると指摘する。そのために、課題の設定者は専門コーパスの言語データから、コース参加者の言語およびリテラシーニーズ、これまでの教育背景と経験、言語学習の認識などを引き出すことが大切。

〈ニーズ分析だけに留まらない視点が必要〉

2 グローバルな視点での EAP の指導と学習（グローバルな視点からみる EAP の必要性とは）

2.1 現在行なわれている EAP

○アメリカの EAP

- ・ 高度な双方向的少人数クラス。
- ・ 最高学年の多くのコースでは授業への参加度合に基づいて評価される。
- ・ 高等教育機関の EAP 単元は、一般的には書く、話すといった生産的な技術に重点がおかれる。話す活動の例…発音、討議、プレゼンテーション、適宜特別授業。

Michigan Corpus of Academic Spoken English (MICASE)を使用することも。

○南米

中級英語の教科書、技術的レポート、学術的な論文を学ぶ・読む学生の支援。

○イギリス、スペイン、オーストラリア、最近では東欧、中国、イランにおける EAP 単元はその二つの間のどこか。

現行の EAP 教育のイメージ図

話す・書く（能動的）

読む（受動的）

アメリカ ←

→ 南米

イギリス、スペイン、オーストラリア、最近では東欧、中国、イラン（順不同）

2.2 学術的な読解と話す聞く能力は講義や課題に触れることでも獲得できるが、EAP をより前向きに学習する必要がある。

学術的な書類を例に

学部 …短い・少し長いレポート、研究報告、要約、批評、レビュー、そして学期末論文を連続的に行う。

修士・博士…協議の要約、修士論文、助成申請書、雑誌記事、博士論文

2.3 アメリカで考えられている EAP の課題

- ・非英語圏の学生の言語学的背景が第二言語の学術的成果に影響を与える。
- ・今日の高等教育と研究環境において、実践と技術が急速に重要視されるようになり、新しいニーズが生まれている。
- ・留学生は大学外の専門的なコミュニケーションのための準備もする必要がある。
(「大学内あるいは日常生活で使える英語」の他に、「学会等大学外での英語」を学ばなくてはいけない。)

2.4 イギリスで考えられている EAP の可能性

現状：

- ・高等教育機関は、学術研究と研究キャリアの言語学的要求をサポートするために、学部や大学院レベルで必要な EAP を教えられる人を雇っている。
 - ・過去 20 年に亘る大学の多言語化・多文化化に伴い、主に学術リテラシー研究への関心が高まっている。
 - ・概して、実践に重点を置いている。
- EAP を身に着けることで、学生が学問の世界に参加し、学術的な規則や慣習さえも批判できる立場に立つ権利を有することに繋がる。

3 第二言語学習に関する研究（第二言語学習における EAP の教育は、何を目的に何をすべきか）

3.1 紹介する論文について

本論で触れる研究は、主に三つの EAP 雑誌 (English for Specific Purposes, Journal of English for Academic Purposes, Journal of Second Language Writing) で発表されている。

3.2 学術的なフレーズやスタイルの使用

「phraseological patterns (フレーズパターン)」、「lexical bundles (自然な語の組み合わせ)」とも呼ばれる頻出するマルチワード構成の使用についての調査。

※「phraseological patterns (フレーズパターン)」、「lexical bundles (自然な語の組み合わせ)」とは、様々な学問分野の専門学術誌の大規模なコーパスからのデータを基に言語の多様性を考慮したマルチワード構成のこと。

Biber & Gray(2010)や Cortes (2013)の論文

→内容や機能に言葉・文法の構造、そのうえ、マルチワードの意味について教えるべきである。

Cortes(2013) : 文書を作成する過程に入る前に、学習者は修辞的な表現やステップの中で、特定のコミュニケーション機能を伝達するためのバンドルの使用あるいは不使用に気付けるように、学習者自身の専門分野コーパスを作成すべきだ。

〈論文には、そのジャンルならではの「phraseological patterns (フレーズパターン)」、「lexical bundles (自然な語の組み合わせ)」が使われる。それらを学ぶ必要がある。〉

3.3

Hyland(2010)、Lim(2010)、Molino(2010)の論文：

大規模、小規模コーパスを用いた専門分野における言語の変動観察。人称代名詞などの言葉の使い方の分析。

Wingate(2012)の論文：専門家の調査の説明。

Wingate(2012)：原典を扱う際の批判性の欠如、主張を補強するための引用方法の誤り、著者の位置づけの難しさが学部一年生の主な課題である。

→議論や個人間の metadiscoursal な方法のほか、スピーチに関わる言語戦略にも重点をおいた豊富な指導が必要。

生徒の文章を用いて、ジャンルや修辞法のセクションを横断して対人関係の言葉の指標に気付く教授法も提案される。

3.4 修辞的な文書構成の知識

マクロ、中間、ミクロレベルでの修辞的組織と学問のテキスト組織の規則遵守についての論文。

主な論文：Lin and Evans (2012)、Sheldon's (2011)、Loi(2010)、del Saz Rubio(2010)、Lim(2012)

基本的に、専門的学術文書は導入、方法、結果、考察といった「デフォルト」なマクロ構造と序章を書くために確立された moves/steps に沿って書かれる。違うのは、分野と言語による小さな変化のみ。

→〈そのジャンルの特徴として小さな変化が見られる。〉

Lim (2012) and del Saz Rubio (2011)は、そのミクロレベルの修辞的な特徴 (metadiscourse markers) が研究論文の導入においてどのように変化するかを分析し実用的に書いた。

特に Swales の Create-A-Research-Space (CARS) モデルは研究論文の導入を書く方法を教えるので、教育的に密接に関係する。

3.5 文書作成過程における典拠をまとめるための方針と文書資料の使用

パッチライティングと不適切な引用の使用についての主な論文

第一言語／第二言語文書における原典の使用(Wette, 2010)

専門家／初心者の文書における引用の種類と機能(Mansourizadeh & Ahmad, 2011)

典拠のテキストの借用における学習者の見解と実践(Hirvela & Du, 2013; Pecorari & Shaw, 2012;

Weigle & Parker, 2012)

以上から、引用の規則や文章の盗用防止ソフトウェアに関する知識の欠如、典拠の帰属、内容の正確な要約、引用したときの自分の意見の述べ方の難しさなどが報告される。

Pecorari and Shaw's (2012)：不適切な引用に関する教師の多様な考え方

Hirvela and Du's (2013)：学術的な文章の文化の中では典拠の文章も異なって認識される。

→〈教師やジャンルによって、引用などの仕方も異なる〉

引用の典拠、仕方、機能、および要約、論者の立場を示すなどの方法を教えなければならない。

3.6 上級・初級の書き手の、自らの第二言語の学習プロセスについての認知についての論文
文章と文章の作成プロセスの両方を調べることで、第二言語と第二言語の読み書きに関する問題を述べる。

主な論文：Mungra and Webber (2010)、Stapleton (2012)、Lin and Morrison's (2010)、Perez-Llantada et al. (2011)、Charles (2012)

上級者も初心者も直面している言語問題は驚くほど類似している。

具体例) 語彙や文法上の誤り、語彙の少なさ、構文、修辭的慣習的スタイルの使用

→中等教育に含まれない、研究論文を書く技術、引用や言い換え等に焦点を当てて、学問独特の文章をより良くするためのコーパスを構築するべきである。

キャリアの浅い研究者のためにも、そのジャンル独自の特徴への認識を高めるような指導を行うべきだ。

学術英語研究の将来の調査のための疑問

- (1) 実際の言語使用にあう正しい指導、および／または分析、討論、議論および広範な練習に学習者を関与させる作業に、第二言語学習における促進効果があるか。
- (2) 認識、批評、注意などが学習プロセスを強化するかどうか。
- (3) 学術的な第一言語での書く文化の知識が、第二言語での文書作成と実際の文書作成量についての書き手の見解にどの程度影響するか。

4 コーパスとEAP指導 (コーパスはどのようにEAP指導に資するのか)

4.1,2 ソフトウェアプログラムを利用して、実例を授業や教材に使いEAPを学ぶ可能性が広まった。現在コーパスは、学生のラップトップを使って簡単に利用でき (Lee and Swales, 2006)、特定の分野の研究論文などの電子テキストをコーパスファイルに変換することも比較的簡単にできる。そのため、DIYコーパスを作ることができる。

こういったDIYコーパスは国際的に学術的な仕事をしようとする博士課程の学生がEAPを学ぶのに特に役立つ。母語話者の情報提供に依存する必要もなくなる。

4.3 EAP指導員にとっての利点

- ①適切なサンプルを見つけるのがはるかに簡単かつ迅速であること。
- ②学術論文独特の言葉が探しやすいこと。

4.4

コーパスに基づいた教材を修辭的組織についての学生の意識を高めるために、使うことを示唆した論文もある。(del Saz Rubio, 2011; Lim, 2010; Lin & Evans, 2012)

マクロ、修辭学レベルでの意味論的および実用的な意味に注意を払い、書く作業で使用することに焦点を当てるのが良い。Yoon's (2011)はコーパスがもたらす書くことへの恩恵を示唆し、さらに学習者の自律性を高めるのに適した参考ツールであるとも述べる。小論文の作成、自分の作文の改訂、自己評価も、共同EAPおよび第二言語取得 (SLA) /第二言語学習 (SLL) 研究の対象になった。

5 EAP と学習者の多様性(多様性の中で EAP を教育するときには何を意識すべきか)

5.1 EAP の新しいシナリオの形成の背景：国際的な流動性や知識の交換

5.2

異文化コミュニケーションの幅広い理論的枠組みに適合するモデルである、「有能な文化間コミュニケーター」は、第二言語評価のより適切なターゲットモデルである。

今後の EAP の実践者研究の領域には

- ・言語能力と文化間能力の調査
- ・それらの関連性
- ・異文化能力の構築の検証を EAP 評価にいれる。

が入るようになる。

他にも必要なこと

- ・「異文化認識」の概念のさらなる理論化。
- ・どのように第二言語の文化的側面の獲得が行われているかをより正確に把握する。

5.3 第一言語における文化と第二言語の活用との相互作用

見直されている EAP 研究の文献として、(Loi, 2010; Sheldon, 2011) による、別の言語の EAP 間を横断する言語的普遍性と文化的特質の経験的説明がある。

他にも、典拠となるテキストの修辭的機能についての学生の認識が、学生の文化的グループ全体で異なることを示した。(Hirvela and Du's , 2013)

→書き手の第一言語における学術的な文章の文化が、第二言語におけるテキスト作成方法の見解に影響を与えることがわかる。

例) 議論における学習者の視点、目には見えない学びの方法やスタイルなど言語学習の認知

〈第一言語のジャンルの知識を第二言語での書く作業の基礎として機能させる方法をとるのが良い。

(Salo & Hanell, 2014)〉

5.4 これからの EAP 教育に必要なもの

EAP の専門家は学生が書く方法をより良く理解するために、彼らの第二外国語の読み書き遍歴も把握している必要がある。Swales (1998) and Paltridge (2008)は、言語と文化の関係を調査するアプローチとして「textography」を提案する。

※「Textography」に必要なもの

- ・草稿と最終テキストのテキスト分析
- ・以前のインタビュー、アンケート、執筆課題、など定性的なデータ収集。

Paltridge (2008)はこれらを著書の中で、「テキストが書かれている世界、テキストがそのように書かれている理由、文書を導くもの、書かれたテキストの背後にあるもの」といつている。

〈専門家は、EAP 学習者の長所、弱点、機会をしり、研究情報に基づいた教育的決定をするようにすべきである。〉

4)考察したい点

- ①日本語は国際的な学術の場で共通言語となるのか。また、ならないとしたら、学ぶ目的とは何か。
- ②①を踏まえ、どのように教えればその目的をかなえられるのか。
- ③コーパスを日本語教育で使う場合、どのような可能性が考えられるか。
- ④日本語で論文を書く場合に困る点は何か。指導者どのようにアプローチすれば解消されるのか。(アメリカやイギリスなどの例を踏まえて)

5)参考文献

Wikipedia 「John M Swales」 https://en.wikipedia.org/wiki/John_Swales

ResearchGate 「John M Swales」 https://www.researchgate.net/profile/John_Swales2

ResearchGate 「Carmen Perez-Llantada」 https://www.researchgate.net/profile/Carmen_Perez-Llantada

グーグル翻訳

6)ディスカッションのまとめ

主に「なぜ私たちは論文が読めないのか」「私たちはなぜ他分野の論文が読めないのか」という二点についての意見が挙げられた。ジャンル、分野には場を形成する人々の中で作られてきた文化があり、その文化を知らない者にとって、論文という専門的な言語が使われる文章を読むことは難しい。また、同じ分野であっても、母語でならば論文を書けても、他言語では難しいとの意見が多く聞かれた。さらに、たとえ同じ分野かつ母語であっても指導する教授が異なる場合には、やはりその場に以前からいた者たちの間で共有されている文化があり、スムーズに入れず戸惑うという意見も出た。論文を始めとした学術的な文章・会話はある意味でとても閉じられた世界であり、その文化の中で時間を過ごすことによって共有されるものが多くあるのであろう。本論文では、ジャンルの外部にいる人間が早く文化の共有をするためにコーパスを用いることを例示する。確かにジャンルの中に入ろうとする側の人間にとって、コーパスは大きな役割を果たすことであろう。

4:1 の比率で英語を母語としない学者が活躍する学問の世界で用いられる英語は、ジャンル内でのみ「正しい英語」であるのかもしれない。そう考えていくと、学習者にとっての学びたい言語にはますます多様性があるように感じられる。では、ジャンル内の文化を背負う者でないと学習者に教えることはできないのか。発表者はこれが母語話者でなければ、その言語を教えられないのかという問題にも通じるように思え、今後も考えていきたいと感じている。

また、ジャンルに入る者にもすでに背負っている文化があるという本論文中にも見られる点は大いに頷ける。指導者が念頭に入れておくべきことであろう。ジャンル内にいる人間も、この認識があれば、相互に影響しあい、より一層のジャンルの発展が望めるのではないかと考えている。